

Title	「無能力者」についての研究ノート 九鬼周造の哲学から
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	年報人間科学. 30 P.175-P.190
Issue Date	2009
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6834">https://doi.org/10.18910/6834</a>
DOI	10.18910/6834
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「無能力者」についての研究ノート 九鬼周造の哲学から

山森 裕毅

### 要旨

十九世紀から二十世紀にかけて、人間の無能さ・無力さを示すことを活動の基底に置く芸術家・哲学者の一群が存在する。それは、アントナン・アルトー、カフカ、ハーマン・メルヴィル、サミュエル・ベケット、ジル・ドゥルーズ、ジョルジョ・アガンベンなどが形成する一群である。アルトーの「impouvoir」やドゥルーズの「impuissance」、アガンベンの「impotenza」という用語から、彼らの描く人間を「無能力者」と呼ぶことにしたい。ところで、この無能力者を思考する一群には、今のところ特定の一貫した理論があるとは言えない。しかし、彼らは無能力者という一見否定的な概念を、肯定的なものとして理解している点で共通している。

本稿は、無能力者とそれが描き出す領域に、九鬼周造の哲学を通して、ひとつの理論を与えることを目指す。九鬼哲学自体、無能力者をその思想の基底に置くものであり、それは九鬼によって「偶然者」と呼ばれるものである。まず一章で、『いき』の構造』から「無能力者」概念を引き出す。次に第二章で、無能力者という概念が『偶然性の問題』において、どのような事態を

描くことを可能にし、そこでのような存在論的身分を持つかを検討する。第三章では、偶然性の議論が時間と関わるかぎり、時間と無能力者の関わりを示す。最後に四章では、無能力者の身体や空間への関わりを考察する。全体を通して、人間の無能力を肯定する事態についてひとつの見通しを与えることを目指す。

キーワード

無能力、偶然性、同一性、身体、現実性

impuissance, hasard, identité, corps, réalité

## はじめに

十九世紀から二十世紀にかけて、人間の無能さ・無力さを示すことを活動の基底に置く芸術家・哲学者の一群が存在する。それは、アントナン・アルトー、カフカ、ハーマン・メルヴィル、サミュエル・ベケット、ジル・ドゥルーズ、ジョルジュ・アガンベンなどが形成する一群である。

彼らが描く無能な人間とは、例えば、アルトーの「思考することができない者」、カフカの「官僚的システムの内部でさまよう者」、メルヴィルの「しないほうを選ぶ者」、ベケットの「事態を把握できずにおしやべりに時間を費やす者」、ドゥルーズが映画史のなかで見出してくる「見者」、アガンベンが美学史から引き出してくる「中味のない人間」、などである。このような者たちを、アルトーの「impouvoir」やドゥルーズの「impuisance」、アガンベンの「impotenza」から、ここではとりあえず「無能力者」と呼ぶことにしたい。とりあえずと言うのは、この「無能力者」を思考する一群には、今のところ特定の一貫した理論があるとは言えないからである。しかし、彼らが「無能力者」という一見否定的な概念を、肯定的なものとして理解している点で共通しているのは確かである。

そしてもうひとつ、彼らには共通点が見出せる。それは身体とそれに関わる空間の強調である。アルトーは「無能力者」の観点から「器官なき身体」という思想に至っている。カフカは、「城」の周囲

や「アメリカ」といった、さまよわれる空間を描いたし、あるいは機械によってエクリチュールを刻み込まれる身体や虫への変身を描いている。メルヴィルならバートルビーの衰弱して行く身体や白鯨を追って駆け巡られる大海原が描かれる。ドゥルーズにおいても、彼の映画論のなかで「見者」によって見出されるのは時間の直接的な表象としての時間のクリスタルだが、その背後で、その時間の秩序の変容に従って空間が変容を被っていると考えることができる。

このように「無能力者」を積極的に主題化され、またそれによって身体⇨空間性が際立ってくるのはなぜなのか。人間が「無能力」であるということは一体いかなる事態なのか。

この問いに応えるという大きな仕事は本稿においてはできない。しかし、このまだはつきりしない領域に、ひとつの理論を与えてくれるのが、九鬼周造の哲学であるだろう。九鬼哲学自体、「無能力者」をその思想の基底に置くものであり、それは九鬼によって「偶然者」と呼ばれるものである。

九鬼の哲学は、存在根拠の問いに、存在様相としての「偶然性」によって応えようとするものである。この偶然性の議論が、自己の無能力を露呈するものとして展開していくのである。九鬼の主著である『偶然性の問題』や、それ以降の偶然性に関わる諸論考に従うなら、自己の存在根拠のうちに「偶然性」を見出す時、人間は自己の無能力を露呈するのである。しかし、それら論考に先立つ『いき』の構造』から考えるならば、事態を逆のように考えることができる。要するに、『いき』の構造』が主題とする遊郭を舞台とした男女の

無目的な自律的遊戯を、一種の無能力者の在り様として描き出すことで、そこから「偶然性」についての思考が開けたと考えることができるのである。そしてそこから「無能力者」を「偶然者」という仕方で規定すること、それが『偶然性の問題』のなかで為されるのである。このように、九鬼の哲学に従うなら、少なくとも九鬼哲学の内部で、「無能力者」とは何であるか、その存在論的身分を問うことができるだろう。

以上から、私たちが本稿で問うのは次の二点である。

(1) 無能力者の存在論的身分とはどのようなものか。

(2) どうして無能力者において身体⇨空間性が重要性を持って浮き上がってくるのか。

本稿は「無能力者」とそれが描き出す領域に、ひとつのモデルを提示しようと試みるものである。これらの問いを、私たちは九鬼の哲学のなかで応えることを目指す。まず一章で、九鬼哲学のなかで「無能力者」という発想から新しい哲学的領野が開かれていく場面を描くために、『いき』の構造』における「無能力者」概念を引き出す。次に第二章で、その「無能力者」概念が『偶然性の問題』においてどのような場面をもたらし、そこでどのような身分を持つかを検討する。第三章では、偶然性の議論が時間と関わるかぎりでは時間と「無能力者」の関わりを示す。最後に四章で、身体⇨空間性が強調されてくる理由を問うことにしたい。そして、そのような身体⇨空間性とはどのようなものとして見出されるのかを考察する。

## 1. 『いき』の構造』における「無能力者」

私たちの考察は、九鬼の著作である『いき』の構造』から『偶然性の問題』への九鬼哲学の展開を可能にしたものとして、「無能力者」という概念を提示する。この概念によって九鬼哲学において何が思考できるようになったのか、それを解明することで「無能力者」の意義を測りたい。

ここで一度、九鬼の仕事を簡潔にまとめておきたい。『いき』の構造』が刊行されたのは一九三〇年であり、それに先立って二六年に『いき』の本質』が、三〇年に『いき』の構造』が書かれている。一九二六年から三〇年にかけては他に、二八年のフランスのポロニエーでの二つの講演、「時間の観念と東洋における時間の回復」と「日本芸術における『無限』の表現」がある。また二九年には論文「時間の問題」を発表し、「偶然性」と題する講演を行っている。これが九鬼の偶然論の最初のまとまった考察である。三一年にはポロニエーでの時間論を修正した「形而上学的時間」を発表している。

『偶然性の問題』が刊行されたのは三五年である。その後、三六年に論文「偶然の諸相」と「哲学私見」、三七年にラジオ講演「偶然と運命」、三八年に論文「人間学とは何か」、三九年に論文「驚きの情と偶然性」、というように偶然性に関する発表を立て続けに行っている。

このように見るならば、九鬼が「いき」の構造分析と同時期に時間論への関心を示していることがわかる。その後に書かれる偶然論を見るなら、時間論が偶然論へと展開していったことはわかりやすい(例えば「哲学私見」は偶然を含む様相論と時間論の結びつきを示そうと試みた論文である)。むしろ、「いき」の分析が偶然論へとどう繋がっていくのかは明瞭ではない。

ところで、ポンティニー講演とその修正稿である時間論を読むならば、永遠回帰の時間による同一化を主題としていることがわかる。同一化は後で見えるように必然性の持つ性格であり、これは偶然性とは逆の主題である。とするならば、「いき」の構造分析こそが「偶然性」の萌芽となつたのではないだろうか。しかし、小浜善彦も言うように、『いき』の構造』においては「偶然性」の言葉は見出されない。だとするならば、それは別の形をとって現れているのではない。それこそが、私たちが導入したい「無能力者」である。つまり、九鬼において「無能力者」の考察が「偶然性」を思考できるようにしたと言いたいのである。では、その「無能力者」とは実際のどのようなものか。

『いき』の構造』は、男女異性間のある種の在り方を分析したものである。ここでモデルとなっているのは、遊郭における異性関係であり、小浜によればとりわけそこでの女性の生である。小浜は遊女のアウトサイダーとしての生を強調する。もつとも、私たちはただアウトサイダーだというだけで、「無能力者」だと言うのではない。九鬼自身、芸者について書いたエッセイのなかで、彼女たちが「倫

理的であると同時に美的な「いき」と呼ばれているもので、逸楽と気品の調和した統一(Ⅰ・455)という理想を持って、社会で一定の役割を持つと記している。だから、私たちは「いき」の構造に人間を「無能力者」にする特性があると考えるのである。では、その構造とはどのようなものかを見ていこう。

「いき」とはある種の男女関係を指す現象であり、自己と他者の二元的関係から成ると言える。そしてその二元的関係を「いき」として現象させるために「媚態」、「意気地」、「諦め」という三つの内包概念が導かれる。九鬼によれば、媚態は「いき」の質料因であり、意気地と諦めは形相因である。

まず媚態とは「二元的の自己が自己に対して異性を指定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である」(Ⅰ・17)。そして「二元的関係を持続せしむること、即ち可能性を可能性として擁護すること」(Ⅰ・17)が媚態の本領であり、「異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのづから消滅する」(Ⅰ・17)。媚態が質料因であると言われるのは、これが「いき」を構成する原本となる素材であるからだろう。田中久文の言うように、質料因を身体と読み替えることもできる。身体が他者を求めるエロスや欲望、官能が媚態である。しかし重要なのは、あくまで自己と他者との絶対的な二元的性であり、他者に対する限りない接近と絶対同一化しない距離の維持である。

意気地と諦めはこの二元的性をより強く作用させる働きを担う。意気地とは、「異性に対して一種の反抗を示す強みを持った意識」であ

る(Ⅰ・18)。媚態という自己の他者への同一化しかねない危うき距離の接近を基調にして、「二元的可能性に一層の緊張と一層の持久力とを呈供し、可能性を可能性として終始せしめようとする」(Ⅰ・18)。意気地は他者に取り込まれずに自由であろうとする自己意識である。諦めもまた媚態を基調にしながら、他者との同一化を諦めることであり、「運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心」(Ⅰ・19)のことである。他者との同一化の運命的な不可能性は、むしろ意気地の持つ自己の自由の保証でもある。

つまり「いき」とは、自己と他者との二元性から出発して、そこで他者と同一化したいという欲望を抱きながらも(媚態)、他者に従属せず自己の自由を意志によって保持し(意気地)、自己を超えた運命の観点からその同一化が不可能であることを知る境地である(運命)。ここから、「いき」の現象の特性が、同一化を常にはぐらかす差異性にあると言える。

まず、異性間の概念的差異がある。この差異が経験の場面で媚態となる。媚態の持つエロスや官能は、同一化することでは消滅してしまう。むしろ、無限の接近を可能にする接近不可能な距離こそが媚態をより強度のあるものにする。媚態とは同一化へと向うことで際立つ差異の様態と言える。媚態は、男女の差異から、自己と他者への個体的差異へと展開される。この差異が意気地である。意気地は、自己の個性を他者との同一化への抵抗と、それによって生じる自由によって規定する。ここでは「私は私である」という同一律をはぐらかしていると言える。そして意気地は、自己と他者の同一

化という目的とそれが不可能であるという現実の差異へと展開される。ここに諦めがある。諦めとは、同一化の不可能性を「運命」として肯定することで、現実には捉われず無関心でいることであり、自己と他者との差異の解消不可能性を前にして自己の無力を知ること、自己の自由を自覚することである。これによって成立する自己関係を九鬼は「無目的なまた無関心な自律的遊戯」や「永遠に動きつつ永遠に交わらざる平行線」(Ⅰ・53)と表現している。

さて、「無能力者」とはどのようなものか。ここでは少なくとも三つの点を示すことができる。ひとつは、異性間の差異において、自己が男として生まれるのか女として生まれるのかという発生的な観点に立った、自己による決定不可能性。次に、他者との同一化を媚態によって希求しながらも、それに抵抗する自己決定性。これはアガンベンの言葉を借りて言い直せば「同一化しないことができる」という「無」の能力としての無能力である。そして、自己の能力を超えて作用する「運命」、アルトナーなら「不可逆的な決定性」と呼ぶものに対する無力を、自由という超力へと捉え直していく無能力である。

ところで、あくまでこれらはほめかされているだけで、九鬼が『「いき」の構造』において、主題として追及しているわけではない。その点で、先の点は無能力者についての厳密な規定とは言えない。ただ、次のように言うことはできるのではないか。無能力者とは、同一化に反するものとして、差異性や「無」の問題を扱うことを可能にするために登場してくる概念である。

## 二、『偶然性の問題』における「偶然者」

『いき』の構造』では、同一性と差異性が問題となり、そのなかで差異性の側に無能力者は位置づけられた。『偶然性の問題』においては、同一性は「必然性」へ、差異性は「偶然性」へと置き直され、存在をその様相性から明らかにすることが目指されることになる。

この観点から見ると、『偶然性の問題』は『いき』の構造』の直接的な延長線上にある。ここでは、無能力者が持つ差異性や無の特性が、「偶然性」として主題化されるのである。これによって無能力者は、「いき」という特殊な現象における構造的規定から、様相論の見地に立った存在論的規定へと移行が可能になったと言える。本章では、偶然性の主題化によって規定される無能力者の存在論的身分を明らかにすることを目指す。

『偶然性の問題』において、偶然性はまず必然性の否定として捉えられる。必然とは、「存在が何等かの意味で自己のうちに根拠を持つていること」(I・9)であり、「自己のうちに存在の理由を有し、与えられた自己が与えられたままの自己を保持することである。そうして、自己があくまでも自己を保持する場合には、自己保存または自己同一の形を取って来る。すなわち必然性の概念は同一性を予想している」(I・12)。ここから同一律が必然性の最も厳密な形式と言われる。

九鬼はさらに必然性を三つの様態へと区分する。

(一) 概念とその徴表、実体と属性の同一性。概念とそこから分析的に引き出される判断は必然的關係を持つ。例えば、三角形の概念にとつて、三本の直線に囲まれた面は必然的徴表である。また、属性とは実体の諸々の規定であり、実体の存在の仕方を実質的に表している場合に、必然性が言われる。九鬼によって定言的必然と呼ばれる。

(二) 理由と帰結、原因と結果、目的と手段の同一性。帰結や結果が前件(理由や原因)に常に内在する場合に、必然的と言われる。仮説的必然と呼ばれる。

(三) 全体と部分の同一性。全体とは可能な離接肢の総体を指し、部分は一とつの可能性として全体に含まれる限りで、全体と必然的な關係を持つ。離接的必然と呼ばれる。

これに対して偶然は、「存在が自己のうちに十分の根拠を持っていないことである。すなわち、……無いことの出来る存在である。換言すれば、偶然性とは存在にあつて非存在との不離の内的關係が目撃されるときに成立するものである。有と無との接觸面に介在する極限的存在である」(I・9)。必然性の否定として、偶然性もまた三つの様態を持つ。

【一】概念に対して例外的なもの、非本質的徴表を持つもの、稀にしか存在しないものの偶然性。概念の同一性の圏外に属する

「個体」の存在を意味する。定言的偶然性。

【二】理由や原因、目的を持たないものの偶然性。ある系列内に前件の非存在を認める消極的偶然性と、二系列以上の系列の間に理由や原因とは言えない何らかの關係の存在を認める積極的偶然の二つのタイプがある。「邂逅」の偶然性が際立たされる。仮説的偶然。

【三】離接肢の全体のうちで、そうであったかもしれない無数の可能性からひとつのものが選ばれてくること、例えば私が生物であつて、そのなかから深海魚でも、カピバラでもなく、人間として「誕生」したことの偶然性。離接的偶然。

偶然性についてのここまでの記述から、無能力者の存在論的身分を挙げることができる。

①無能力者とは、存在の根拠を自己の内に持たないために、「存在しないことが出来る」存在である。しかし、九鬼のこの言い方は適切ではない。むしろ、「存在しないことも出来た」というべきである。今ここで消滅するかもしれない危うさやアガンベン的な「無」の能力が問題なのではない。重要なのは、自己の内に存在の根拠を持たないのに、現に存在していることの「現実性」である。

②この「現実性」は、概念や本質から排除される非本質的で例外的な個体的存在を許容する。この例外的個体が無能力者である。すると無能力者は、概念や本質とは別の仕方では現実化する次元を開

示する存在であると言える。例えば、四つ葉のクローバーは、クローバーの本質的徴表（三つ葉のクローバー）からすれば、例外者である。例外的でありながら個体化するところに無能力者の特性がある。

③例外的個体は、その存在に何かしら原因を持つだろうと考えるとき、理由性、因果性が思考の対象となる。原因を特定できるならば、クローバーが四つ葉化することの必然性を言うことができる。しかし、それが例えば栄養状態であつたり、胚への裂傷であつたりしたとして、なぜこのクローバーにそれが起こつたのかを、クローバーの内から説明することはできない。そこにはこのクローバーと地面との邂逅、この胚とそれを傷つけるものとの邂逅の偶然性が見出される。すると、無能力者とは、自己の系列に閉じこもらず、他者との思いがけない（自己の制御を超えて生じる）邂逅に自己を開いている存在である。これは『いき』の構造』において見られた、二元性の展開であるだろう。

もうひとつ、離接的偶然に関わる無能力者の存在論的身分を挙げることができるが、それは章を改めて、九鬼の時間論に関わる形で扱いたい。ここでは、上で挙げた身分から無能力者の意義を考察しておこう。

『いき』の構造』では、無能力とは「同一化しないこともできる」という「無」の能力と、運命に対する自己の無力つまり「同一化できない」を「別の仕方では」肯定する能力であつた。前者は「抵抗」



であり、後者は「執着に対する解脱」と呼ぶこともできる。どちらも自己による「無」の能力の実践的な使用と考えられる。

それに対して『偶然性の問題』では、存在根拠も無いのに存在してしまう能力、一般的であることから外れて例外者として存在してしまう能力、自己の制御を離れたものに曝されてある能力が挙げられる。ここでの無能力は一見、自己の制御を超えて作用するものに対する自己の受動性や無能・無力・「できなさ」を指すように思われる。しかし、別の仕方で考えるならば、無根拠な存在としての「無」からの現実化の能力、一般的なものに対する特異なものへの産出の能力、自己を超えて作動する世界の躍動の能力というように肯定的に捉えることができるのではないか。ここでの無能力者は自己の無能・無力を肯定的に捉え返すことで、世界の「無」を介した産出性の次元を見る者、「偶然者」である。この「無」による産出性が「偶然性」と呼ばれるのである。

### 三. 原始偶然と運命

「無」を介した産出の場合が際立ってくるのが、離接的偶然であり、私たちの観点から言えば、四つ目の存在論的身分に関してである。

仮説的偶然性における「邂逅」の偶然性を示すことで、系列の多数多様を考えることが可能になったとき、その総体としての全体が浮かび上がってくる。この全体はその内部にこの全体を破綻させる

ような部分を含まない限り、必然的である。この全体の究極は、あらゆる可能性の総体であり、また「絶対的に一なるもの」であって、九鬼によって「形而上的絶対者」あるいは「神」と呼ばれるものがある。すると、この全体の外部を考えることはできない。もし偶然性について考えるならば、先に述べたもののように必然性から逸脱していく偶然性ではなく、ここでは絶対的必然性の内部で作用する偶然性を考えなければならない。それが、諸可能性の全体からひとつの可能性が現実化する偶然性、つまり離接的偶然性である。これとはとりわけ「原始偶然」と呼ばれるものである。

原始偶然は、二つの仕方で語られる。ひとつは、仮説的偶然の観点からである。私たちは先に邂逅を偶然なものとした。しかし、もしその邂逅する二系列に共通の原因があるとすればどうか。例えば、二人の男女が出逢ったとして、その出逢いが共通の友人の見舞いに行った病室であつたとすれば、偶然性は薄らぐのではないだろうか。そしてこの友人の病気は友人と菌の邂逅であつて、これもまた生物の発生と生存という共通の原因を持つのではないか。このようにして九鬼は、邂逅する二系列を辿って共通の原因を特定するという必然化の作業を無窮に追い始める。すると、この無窮に遡られた一点としてxに辿り着く。それはそれ以上遡ることのできない理念的な始原の一点である。そしてその点が、それをもたらす系列を持たないため、それが存在することが必然的ではない点である。この点が「原始偶然」である。

もうひとつは離接的偶然の観点からである。先ほど述べたとおり、

無数の可能性の全体からひとつが現実化してくるその偶然性である。ところで、ここで重要なのは、この説明のために導入される「可能性」であり、また可能性と偶然性の関係である。可能性は、偶然性が必然性の否定であるように、不可能性の否定である。ここから九鬼は、様相性を現実性、非現実性、實在性、虚無性の四つの形態によつて規定する。つまり、必然性は實在かつ現実であり、不可能性は虚無かつ非現実である。可能性は實在性を持つが非現実であり、偶然性は虚無だが現実性を持つと説明される。そこでは、可能性は必然性を極限に持ち、そちらへと向かう傾向性を備えており、それに対して、偶然性は不可能性を極限に持ち、そちらへ向かう傾向性を備えていると、九鬼は言う。ここから、偶然性の増大は可能性の減少と考えることができる。すると、次のように言うことができる。原始偶然とは、可能性を消尽させることで発生する「現実化」の出来事である。ここには、九鬼の概念に対する不徹底さが見える。そもそも必然性を無数の可能性の総体と考えるとすれば、必然性は實在性を持つとしても、現実的ではない。むしろ潜在的なものである。というのも、可能性の内には共立不可能なものが存在するはずだからである。しかし、何にせよ重要な論点は、必然性が存在の本質であつて、可能性が展開し現実化して必然性となるような存在が、本来的な存在、存在の本質を担つた存在者であるとすれば、可能性を消尽させる原始偶然によつて生じる存在者は、存在の本質から逸脱しているものであるということだ。カフカの登場人物たち、例えば仕事も無いのに呼ばれてしまった測量士、万里の長城の内側で発生

してしまう遊牧民、ささやかな幸福を享受する家庭に現われてしまった虫、このような存在の本質から逸脱してしまった者たちこそ、(フィクション的な存在者という制限は付くが)まさに「無能力者」と言えるだろう。しかし、存在の本質から外れるとはどういう事態なのか。

ところで、九鬼はこのような無能力者たちに必然性を与えるものを思考する。それは時間、とりわけ回帰的時間である。回帰的時間は、「時間の概念と東洋における時間の反復」とその修正稿である「形而上学的時間」において主題化されたもので、輪廻がモデルであるような循環する時間の流れのことである。ここでは、私たちの生は全く同じ内容で無限に反復されるという。この時間概念が『偶然性の問題』における「運命」に関わる文章において触れられている。果たして、この時間概念は何を意味しているのか。

九鬼は、ベルクソンやハイデガーに倣つて、存在の本質の理解は時間の本性の理解であると考える。九鬼によつて、時間は過去・未来・現在の三様態に区分され、それぞれ必然性・可能性・偶然性という存在様相が配分される。過去は現在までの存続を意味し、既に在つたことであつて、その存在を取り消すことができないという点で必然と言われる。未来は未だ無いものであつて、やがて現実化する何ものかが「将来する」ことから可能と言われる。現在は、過去の存続によつて一定程度規定されながらも許容される可能性のなから、あるひとつが現実化すること、それに特に理由がないことにおいて偶然と言われる。あるいは「今・ここ」での邂逅の偶然

性を言うこともできる。この時間の三様態の連関がひとつの個体の生の時間となる。

しかし、この個体の生の時間は、より長い時間のスケールを採るならば、有限で一回的なものである。その時間のスケールの究極は「無限」である。個体にとって、無限に続く時間の中で、有限で一回的な生を享受すること、そしてそれがまさに「今」であることは偶然である。それを意志し選ぶことなどできずに存在してしまいう点で、まさに無能力である。ところで、無限に続くこの時間を直線的なものではなく、円環状のものと仮想するのだろうか。先ほど言ったように全く同一内容での反復が行われる。しかも、九鬼によれば、全く同一内容の反復のためには、以前の内容は以後の内容に作用してはいけない。そのためには時間は一巡する度に区切られなければならない。その一巡は「大宇宙年」と呼ばれる。すると面白いことに、大宇宙年間に相互作用はなく非連続的であり、かつ同一内容が回帰するということは、有限で一回的な生を享受することに何ら変更を加えない。簡単に言えば、無限個の大宇宙年が同時に同一内容で進行していると考えることができるのである。何にせよ、一回的な生の偶然性は、無限個の大宇宙年によって、過去においても同じであったし、未来においても同じであるような決定された生として、必然性と合致するのである。このような偶然性と必然性の合致は、九鬼によって「運命」と呼ばれる。

運命とは、九鬼に従うならば、自己の実存にとって重要な意義を持つ偶然性である。その偶然性の究極は、今ここでまさにこのよう

なものとして生を受けたという原始偶然である。もしこの生が回帰的時間によって必然的であると考えられるなら、それは確かに運命である。ここには、偶然性に対する自己決定不可能性と必然性に対する自己決定不可能性の二つの仕方での無能力がある。換言すれば「無」と「無限」を前にした無能力である。

この回帰的時間はあくまで仮想的なものである。それは個体の意志による必然化である。しかし、九鬼の哲学はあくまで偶然性の肯定つまり必然性からの逸脱ではなかったか。存在の本質から外れた無能力者の思想をラディカルに追うなら、九鬼哲学はどうなるのか。

例えば田中は、『偶然性の問題』における「運命」を次のように理解している。

「しかし『偶然性の問題』では、…九鬼はこの話「運命」のポイントを、せむしが自己の生の根源にもどって、せむし以外に成りえたであろうさまざまな可能性を想起するという所においている。つまり、この話で彼が強調したかったのは、形而上的背後に立つて現実を見ることによって、自己の生を固定せず、諸可能性の中の一つとして捉えていくという態度であろう。この現実の世界を無数の可能な世界の一つに過ぎぬと考えることによって、我々は普段そのなかで身動きもとれずにいる現実の世界から解放され、無限の展望を開くことができるのである。」<sup>4</sup>

ここから田中は、離接肢とそのひとつの現実化を神のサイコロ遊びやギャンブルという九鬼の表現を重視する。無数の離接肢から（少なくとも）何かひとつを選び、それが現実化することに賭ける。現

実化すれば当たり、別のものが現実化すればはずれ、その遊戯性が運命に対する肯定であると解する。先の例えを用いれば、自己が生身の根源において、せむしとして現実化することに賭けていたのであれば当たり、別のものに賭けていたのであれば、せむしとして現実化したので、はずれである。すると、回帰的時間から引き出されてくる「せむしとして生まれたからにはせむしとして生きることに賭けたのだと意志せよ」という命法は、このギャンブルを遊び抜くひとつの楽しみ方・必勝法として、つまり偶然性に対する実践として、偶然性の内部に含まれるのである。そして田中は、ここでは、当たらうとはずれようとそれが「運命」であり、遊戯なのだから楽しめばそれでいいという解釈をしている。つまり、回帰的時間によって排除されてしまうはずの無数の離接肢は、ギャンブルにおいては排除されないのである。このように、世界をギャンブルとして見ることで世界を動的に捉えることも、必然性に対して偶然性を優位に立てるひとつの行き方であろう<sup>5)</sup>。

しかし、現実性の観点から、九鬼の時間論を見直してみよう。なぜ、九鬼は「時間」に強く必然化の作用を求めたのか。回帰的時間とは今この時代に存在することの無根拠さに根拠を与えることである。逆に言えば、必然化を必要としてしまうのは「今この時代に」居場所がないからである。このように考えるならば無能力者は時代にそぐわないもの、ドウルーズの言を借りるなら時宣を得ないもの、反時代的な存在者として現れるのではないか。しかし、九鬼はこの時代にそぐわずに存在してしまうことの偶然性について、ほとんど

分析を行っていないので、これ以上の記述は別の機会に譲りたい。以上、離接的偶然における存在論的身分とは次のようなものである。

④無能力者とは、可能性が必然性へと展開する方向性から外れて、不可能性へと接近する偶然性において現実化する（あるいは現実化した）ものであり、それは可能な離接肢から可能性を消尽していくことで行われる。それは、必然性を原理とする存在の本質から逸脱するものとなる。それは、時間の観点から見ると、時代にそぐわないものとして「今」に存在してしまう何ものかである。

#### 四・身体と空間

前章において、九鬼の哲学を無能力者の観点からラディカルに突き詰めるなら、存在の無根拠さは、時間における無根拠さに行き着くことを見た。これは「今」に存在していることの無根拠さである。そして、それは今ここにこのような身体を持つて存在してしまっていることの現実性でもある。そして「今」の無根拠さだけでなく、無限の時間のスケールといった自己にはどうしようもない時間を前にするならば、もはや身体を持つことだけが個体にとって生きていくための資源となるのではないか。ここに空間性と身体性が浮き上がってくる。すると、無能力者に関する思考を徹底する限りは、これらにも無能力の契機を見出すべきだろう。しかし、それはどのよ

うなものか。

例えば、ドゥルーズは映画論の中で、人間の行動や運動が出来事に対して「無効となる」ような事態がヒッチコック以後あるいは第二次世界大戦後に現れたことを指摘している。これによって、人間の運動によって時間を間接的に表象する持続の概念から時間を解放し、時間の直接的で純粋な表象を映画が獲得することを示した。この時間は、モンタージュ、フラッシュバック、過去と現在とが識別不可能になる時間のクリスタルなどの映画技術による構成・編集的時間であり、それは人間を運動する者から、事態のなかでただ見ることしかできない者、「見者」にする。身体⇨空間性の無能力は、出来事に対する運動の無効化となつて現れ、そこでの無能力者とは「見者⇨映画」である。しかし、それによってむしろ時間の新しい概念が思考可能になるのである。

では、九鬼において身体の無能力はどのように描かれ、そこから何が思考可能になるのか。例えば九鬼は、せむしに生まれたことの偶然性を説いたのであった。そしてせむしの身体を肯定するために、回帰する時間の無限性を思考できるようにしたのであった。

しかし、九鬼において身体の無能力が際立つのは『いき』の構造』での二元性においてである。と言うのも、田中に従って媚態を身体に発する欲望と考えるなら、それは身体における同一化の欲望となるからである。だが、「いき」の現象が二元性の維持にあるのだから身体における他者との同一化もそれに対する抵抗(意気地)と、同一化の不可能性についての自覚(諦め)によってはぐらかされる。そもそも

欲望自体がその発生において、自他の差異に依存している。そこで身体の同一化に対する無能・できなさが明らかになる。

ここでの論点は身体の欲望が個体であることによる抵抗や諦めによって、達成不可能であることを自覚することで、身体の欲望に従属した行為(「したいこと」)から、欲望とは別の仕方で作動する行為(「できること」)へと思考の領域を開いていくことになる。それは欲望に従属しないものとしての身体の純粋な力を問うものであるだろう。身体はしたいことしかできないのではなく、したくないことまでできることにその力能があるのである。つまり、自己の欲望充足の可能性を諦めることで、身体は欲望を超えた側面を思考可能にするのである。そして、九鬼はその問いの応答として「情緒」を思考する。自己と他者との二元性が、欲望がそうであるように、身体を触発するものとしての情緒を発生させるのである。このように、欲望を質料因としていた「いき」は、欲望をひとつの要素として含む「情緒」へと新しい展開を示したと言える。

九鬼の情緒論を詳しく論ずることは、本稿の主題を外れるので別の機会に譲るとして、ここでは九鬼のプログラムの大枠だけ述べておこう。九鬼に従うなら、「情緒とは肉体と心との合一としての人間が、物の存在の仕方に対する有機的な反応」(目・25)であり、「物が主体の包摂作用に対する在り方によって、主体の感じる感情」(目・152)であつて、「自然的人間の人間学の主要な問題である」(目・25)。(ここ)では、情緒は人間における自然として描かれる。そして、自己と他者との関わり方から導き出せる情緒は、『いき』の

構造』に照らし合わせるなら、欲望への諦めから導き出せる自由と合致する。すると、情緒は人間における自然であると同時に自由でもあるということになる。それは言い換えれば、身体における種的自働性と個体的自発性、「おのずから」と「みずから」の一致を言うことこそ情緒論に課せられているということである。

九鬼が情緒論を描くために採用している構造は、以下のようなものである。

- Ⅰ 自己を発生源とする純主観的感情（嬉、喜、楽、悲、嘆、苦）
- Ⅱ 他者や対象の存在によって触発され他者へと向かう客観的感情（愛とその派生的情緒、憎とその派生的情緒）
- Ⅲ 上記の情緒やさらに細かい個別的な情緒を可能する根底的情緒（快・不快、興奮・沈静、緊張・弛緩）

この三種の情緒の関係によって、自然でありかつ自由であるような身体の自然が語られることになる。特に、興奮・沈静の軸は、「驚き」によってもたらされる情緒で、情緒における偶然性の表現になっている。

すると、身体における無能力とは、欲望を諦めることで、同一化から逃れた行為を思考可能にすることである。それは、身体における「できること」であり、人間に備わった自然が自由でもあるという事態を開くものである。すると、無能力者の身体に関しては次のように規定することができる。

⑤無能力者は、身体において欲望を諦めることで、身体にできること（身体にしかできないこと）、つまり情緒を生きるものである。その情緒とは、人間の身体に備わった自然でありかつ自由であるということをも思考可能にするものである。それは他者との二元的関係に緊張を維持するものでもある。緊張と弛緩、興奮と沈静といった強度の移行を思考可能にするのも、身体と情緒の関係に固有の領域である。簡潔に述べるなら、無能力者の身体は、自然と自由と強度を固有の対象とするものである。

## 結び

私たちはここまで九鬼哲学を通して無能力者の存在論的な問題を扱ってきた。実際九鬼が無能力者という言葉を使用したことはない。私たちが目指したのは、九鬼哲学によって無能力者という概念にひとつのモデルを与えることであつた。「遊女」や「偶然者」についての九鬼の記述を追うことで、無能力者という概念にひとつの見方を提示できたのではないかと考える。それは、必然性や同一性、そして存在の本質から逸脱した存在者を描くことであつた。①～⑤によって、一通りのまとまりをつけることができたと思う。そして「無能力」に関しては、次のようにまとめることができるだろう。

ひとつは能力の無としての「無能力」。これは無能・無力・できないという事態を表していた。次に、無の能力としての「無能力」。これはしないこともできるという潜勢力としてアガンベンによって提

示されたものである。最後に無能であることから別の仕方でも力を引き出してくるような「無能力」。これは無による産出力とも言えるものであつて、最も重要な観点であるだろう。アルトールなら思考の無能力から器官なき身体の発見へと向かうし、ドゥルーズなら運動の無効化によって時間のクリスタルの発見へと向かう。九鬼ならば、運命に対する無力を自覚することでこそ、自由を享受することができようになる。

このように無能力とは、無能であることからのような肯定的な能力を引き出すのか、無能であることからのようにまた始めるのか、これを思考するための概念と言えるだろう。逆に、有能であることは同一性や必然性の下で固着してしまうこと、うまく機能してしまうことである。そうではなく、うまく機能しないことによつてしか、新しいもの、つまり時宣を得ないものを産出することができないこと、これが無能力の最大の能力ではないだろうか。

しかし、問題はなぜこのような無能力者についての思考が十九世紀から二十世紀にかけて現われてきたのかということである。ここに時代の一貫性があるように思われるが、それに対する考察は別の機会に譲ることとする。

凡例…九鬼の著作からの引用はすべて岩波書店『九鬼周造全集』（一九八〇〜八二年）による。引用に関して漢字を一部新字体に改めた。引用文には全巻本の巻数・頁数を付したが、ローマ数字が巻数を、数字が頁数を表わす。

<sup>1</sup> ジョルジョ・アガンベン『パトトルビー 偶然性について』（高桑和巴訳、

月曜社、二〇〇五年）の訳者である高桑によれば、「impotenzaの含意は「できない」という意味での無能力ではなく、「しないことができる」という意味での「非の潜勢力」である。ここでは、無を形而上学に固有の課題であると説く九鬼に従つて、「非」ではなく「無」と提示しておく。

<sup>2</sup> 「肉体を引き裂かなくとも、純粋な残酷を難なく想像することができません。それに、哲学的にいつて残酷とはなんでしょうか。精神の観点に立つなら、残酷とは厳格を、抗し難い適用と決意性を、不可逆的で絶対的な決定性を意味します。……残酷は何よりもまず明晰であり、厳格な指導、必然への服従なのです。」Antonin Arnaud, *ARZAUD Gueryes*, Gallimard, 2004, p.566.

<sup>3</sup> 「偶然性の問題」手沢本への書込み」にある図(II・262)を参照した。  
<sup>4</sup> 田中久文、『九鬼周造 偶然と自然』、ベリカン社、一九九二年、P.145頁。

<sup>5</sup> 九鬼周造における偶然性の賭博的性格から、強く個体の能動性を打ち出した著作に檜垣立哉、『賭博／偶然の哲学』（河出書房新社、二〇〇八年）がある。本稿は、この著作とその準備のための講義に強い示唆を受けている。檜垣の言う「賭博者」の生は、ここで言う「無能力者」のより実践的・具体的な場面を描いていると言える。

#### 脚注にない参考文献

- 小浜善彦、『九鬼周造の哲学 漂白の魂』、昭和堂、二〇〇六年  
坂部恵、『九鬼周造 不在の歌』、TBSブリタニカ、一九九〇年  
坂部恵・鷺田清一編、『九鬼周造の世界』、ミネルヴァ書房、二〇〇二年  
三河隆之、『横溢する命法―九鬼周造にみる現実性の哲学』、『表象文化論研究』、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論刊、二〇〇八年

ジョルジョ・アガンベン、『中味のない人間』、岡田温司・岡部宗吉・多賀健

太郎訳、人文書院、二〇〇二年

Gille Deleuze, *Différence et répétition*, Puf, 1968.

*L'image-mouvement*, Minuit, 1983.

*L'image-temps*, Minuit, 1985.

*Critique et clinique*, Minuit, 1993.



## La pensée sur l'«impuissance» chez la philosophie de Syuzou Kuki

Yuki Yamamori

Du dix-neuvième siècle au vingtième siècle, il y a des écrivains ou des philosophes qui ont réfléchi sur « l'homme impuissant », par exemple, « impouvoir » chez Antonin Artaud, « impotenza » chez Giorgio Agamben, « impuissance » chez Gilles Deleuze. Ils essaient de saisir positivement « l'homme impuissant » comme une nouvelle puissance d'homme ou comme une nouvelle cognition du monde. Mais il n'y a pas encore de théorie qui englobe toutes ces notions sous un genre unique.

Cet article a pour but de proposer une théorie sur « l'impuissant » en examinant la philosophie de Syuzou Kuki. Ce qui correspond à « l'impuissant » est appelé « *Guzensya* » ( l'étant au hasard ) chez Kuki. D'abord, nous ferons apparaître « l'impuissant » dans *la structure de « iki »*. Ensuite, nous allons rechercher le champ que « l'impuissant » ouvre et son statut ontologique dans *Le problème du hasard*. Enfin, nous montrerons la relation de « l'impuissant » avec le temps, l'espace, et le corps.